

日本比較文化学会・中部支部ニュース

第4号 2014年1月24日発行

2013（平成25）年度 中部支部第4回大会報告

2013年10月5日（土）、浜松学院大学において中部支部第4回大会が開催されました。以下、発表要旨を掲載いたします。（※敬称略）

○テーマ：改めて「比較文化」を見つめる 【第1部】

総合司会：安藤 雅之（常葉大学教職大学院）

- ・基調講演「比較文化とは？－学会創設から中部支部誕生まで－」
太田 敬雄（日本比較文化学会名誉会長，国際比較文化研究所長）
- ・公開討論会「今、改めて「比較文化」を考える」

パネリスト：岡本 武昭（中部支部長）
津村 公博（浜松学院大学）
太田 敬雄（前掲）

コーディネーター：川口 雅也（浜松学院大学）

基調講演・公開討論会をふり返って

川口 雅也（浜松学院大学）

異分野の研究者が集まる学会という「サロン」を作りたいという思いから日本比較文化学会を創設したという太田氏の「文化を考えるときに、自ずと比較という概念が入っている」という、比較とは無意識的な行為であるという指摘をいただいた。続いて、岡本氏には、経営の研究をするときにも比較が無意識に入ってくるのかと尋ねたところ、経営の世界では、競争相手と自らを比較することで、相手の利点を学び、それを自らの経営発展につなげるという、自らの発展につなげるための比較という行為が浮かび上がった。浜松市で暮らすブラジル人の生活向上に尽力している津村氏は、子どもたちが背景としているそれぞれの文化の違いは教育にとっての負担ではなく、あたりまえのこととして受け入れるという比較の在り様を指摘された。

聴衆からも複数の意見が聞くことができた。比較教育学においては、○か×かの判断は非現実的であり、程度をも考慮した3つめの選択肢があるはずだという、二元論的な比較からの脱却が必要だという見解。さらには、文化比較においては、空間だけでなく、時間における比較も大切だという指摘。そしてまた、究極的には、比較とは結局は他者を通じて自分を知ることだという認識。このように、多元的で、時空を越え、最後には自己に戻ってくるという、比較文化という行為の広がりが見えられた。

この討論会は文字通り、一方的な見解の押しつけでなく、意見のキャッチボールをしようという試みであったが、学会出席者たちは誰もがそれを楽しんだようで、太田氏の「楽しいときに人は進歩する」という発言を裏付けるように、従来のシンポジウムの進化した形が、たしかに、ここにはあった。



川口雅也会員（浜松学院大学）

【第2部】

司会：澤田 敬人（静岡県立大学）・白鳥 絢也（星槎大学）

・自由研究発表（一人発表 25 分＋質疑応答 10 分）

海外の日本語教育ネットワーク形成に関する考察—中米・カリブ地域を中心に—

荒井 美幸（同志社大学日本語・日本文化教育センター）

海外では、同じ地域にいる日本語教師の連携が図られていない場合が多く、知識の共有や経験の継承がなされにくいいため、ネットワーク形成の重要性が指摘されている。本研究では、中米・カリブ地域のネットワーク形成の事例と、他地域の事例とを比較し、持続可能な日本語教育ネットワークのあり方について考察した。

中米・カリブ地域では、日本語教育を取り巻く環境は特殊である。同地域のどの国においても日本語学習者数は少なく、日本語教師は試行錯誤を繰り返し、アイデアや教材などを共有できる相手がないまま、日々の業務にあたっている状態である。また、慢性的な教師不足でニーズがあってもクラスが開講できない、教材や文化紹介の材料が入手困難、学習者の日本語使用機会が少ないなど、共通の問題点も抱えている。

しかしながら、2009年にコスタリカ日本人会主催により開催された第1回中米日本語教育セミナーにおいて、中米日本語教師ネットワークの組織化の必要性が指摘され、参加者全員一致で「中米カリブ日本語教育ネットワーク」が組織化された。孤立環境の日本語教師たちが、国を越えてまとまることで得られるメリットは非常に大きいと言える。教材や教案をシェアしたり、悩みや問題点を話し合ったりできる仲間ができたことは、日々の活動の大きな支えとなるであろう。

海外の日本語教育におけるネットワークを考えると重要なのは、個々の日本語教師や学習者の自発的な参加である。参加することによって、春原（1992）の言葉を借りれば、「新しい血が導入」される、すなわち、新たな知識や経験が得られることで、教師にひとりひとりに、自信や責任感、やる気生まれ、その血は地域に還元され、他の教師や学習者の「知のネットワーク」をも刺激する。さらにその個人が異なる考えを持ちながらも自発的にネットワークに関わり合い、価値を見出していければ、そのネットワークは継続・活性化されていくのではないだろうか。「中米・カリブ日本語教育ネットワーク」は、海外における日本語教育ネットワークにおいて挙げられている多くの問題点—ネットワークの形骸化・固定化・階層化、現地人教師の非自発的な参加、ネットワークの現地人日本語教師主導への移行の難しさを克服しながら継続されているという点で、注目に値する事例であると言える。

さらに、この動きを日本へも発信していくことができれば、今後、日本の海外日本語教育支援の在り方に一石を投じることも不可能ではないと考える。

日韓母語話者の再勧誘行動について—異文化間語用論からの考察—

鄭 在恩（名古屋大学大学院）

本研究は、日本語母語話者と韓国語母語話者の再勧誘場面にみられる特徴を異文化間語用論の観点から考察を行ったものである。日本語と韓国語の言語行動に関する対照研究は数多くなされてきたが、勧誘行動に関する研究は少ないため、その特徴について言及するデータが不足している。そこで、本研究では相手に躊躇された後に繰り返される再勧誘行動にみられる両母語話者の対人配慮意識と相手

とのテリトリー意識の違いを明らかにすることを目的とする。調査方法は、談話完成テストと意識調査を併用して行い、それぞれ日韓母語話者 30 名ずつを対象にした。場面設定においては、相手との上下関係と負荷の度合いによる 6 場面ずつを設けた。談話完成テストから得られた回答は意味公式に分類し、意識調査から得られた回答はカテゴリー化し、統計処理を行った。分析の結果、次の点が明らかになった。

まず、談話完成テストの結果、目上の相手に対して「詫び」の使用が他の場面より多いことが両母語話者に共通してみられた。また、負荷の度合いが大きい場面において「代案・解決策の提示」と「誘導発話」の数値が大きく、負荷の度合いが小さい場面においては「都合・理由の尋ね」と「次回への勧誘」の数値が大きいが両母語話者に共通してみられた。一方、教え子を部活に誘う場面において、日本語母語話者は「代案・解決策の提示」と「勧誘の諦め」の使用が最も多く、韓国語母語話者は「誘導発話」の使用が最も多くみられ、両母語話者に異なる傾向がみられた。

次に、意識調査の設問①「勧誘に躊躇したらそれ以上に誘ってこない場合、どのように感じるか」にみられた結果は、負荷の度合いが大きい場面において「気になる」の数値が大きいが、負荷の度合いが小さい場面において「気にしない」の数値が大きいが両母語話者に共通してみられた。それに対して、負荷の度合いが大きい場面において、日本語母語話者は「ホッとする / 助かる」の数値が大きく、韓国語母語話者は「申し訳ない」の数値が大きいが異なっている。設問②「勧誘に躊躇したら 2 回も 3 回もしつこく誘ってくる場合、どのように感じるか」においては、日本語母語話者には場面による回答差はみられず、全体的に「押し付けがましい / しつこい」と「面倒だ」の回答が有意に多く、「嬉しい / 有難い」と「勧誘に応じる」の回答が有意に少なくみられた。一方、韓国語母語話者は「勧誘に応じる」の回答が有意に多くみられ、異なる傾向であった。

以上の談話完成テストの結果から、日本語母語話者は自分の意向や気持ちは示さず、相手に負担をかけないように心がけており、韓国語母語話者は自分の意向や気持ちを明確に伝えて相手に積極的に働きかける傾向があり、それが相手への配慮とされていることが推察できる。また、意識調査の結果からは、日本語母語話者は相手との距離を大きく取る傾向があり、お互いにとって良い距離感を保ちながら相手と関わることを好む傾向が考えられる。それに対して、韓国語母語話者は相手との距離を小さく取ろうとする傾向があるため、一歩踏み入って相手と関わることを好む傾向があると考えられる。

米国におけるテレノベラの普及とソープ・オペラの衰退

塚本 美穂 (京都外国語大学大学院)

米国では現在ドラマ番組としてテレノベラが流行っている。テレノベラは元々中南米諸国で制作されたメロドラマであり、人気のあるものは高視聴率 60~80 パーセントを誇っている。製作されているテレノベラは、スペイン語圏はもとより米国南部ではスペイン語放送されてきた。そして米国ではテレノベラの英語版、さらにはリメイク版が 2006 年から本格的に制作されるようになってきた。発表者は、口頭発表でテレノベラと米国のメロドラマであるソープ・オペラについて比較分析した。特に米国におけるテレノベラの飛躍的な普及とソープ・オペラの人気の低迷を対照的に取り上げて、テレノベラの人気の要因、伝達媒体としての役割を持つメディアとメロドラマの関係、メディアによる観念支配に注目した。そしてテレノベラの普及によってメガ企業に発展したメキシコのテレビ会社と視聴率を上げるために視聴者の反応に配慮したテレビ会社の番組制作について検討するとともに、メディアによる視聴者への影響力について考察した。

テレノベラもソープ・オペラもメロドラマという点では共通である。どちらもその多くが恋愛ストーリーが中心の女主人公の日常と成長を描いている。しかしプロット、ストーリー性、話の展開には相違がみられる。テレノベラは身近な社会問題、政治問題、家庭問題を取り上げてハラハラドキドキする話へと展開するが、ソープ・オペラは恋愛を中心としたものが圧倒的に多い。ストーリー性について着目すれば、テレノベラの女主人公は様々な社会格差、社会の抑圧などに必死に耐えて人間的にも成長していく。そして視聴者の多くは、その強くひたむきに生きる姿に共感を持ち、テレノベラに愛着を持ってきたといえる。総じてテレノベラはあらゆる人が見ても共感が得られるように制作されており、悲しい出だしのドラマが最終的には希望が持てるようなストーリー展開になっているのである。そしてソープ・オペラについていえば、テレノベラの人気上昇と相反して米国の人気は低迷しており、その生き残りをかけて米国ではテレノベラを採用し始めたと考察する。

『ボヴァリー夫人』における「新しい女」の可能性－『女の一生』との比較を通じて－

水町 いおり (名古屋市立大学大学院)

本発表では、フランス 19 世紀の小説家ギュスターヴ・フロベールの『ボヴァリー夫人』とギイ・ド・モーパッサンの『女の一生』を取り上げ、両作品の主人公であるエンマとジャンヌを、男女の権力関係をめぐるジェンダー的視点で比較し、「言葉」の考察を通じてエンマの「新しい女」としての可能性を明らかにし、『ボヴァリー夫人』の新たな読み方を提案することを目的としていた。

まず、最初に、外形的な相似性を持つ二人の性格の内面には、積極性・主体性と消極性・他律性との相反する特性があることを明らかにした。また、結婚に対する落胆や、人生に対する両者の考え方や向き合い方の相違も明らかにした。エンマのように積極的に生きても、ジャンヌのように社会規範に従って保守的に生きても幸せになれない二人の姿に、当時の女性たちが幸せに生きていくことの困難さと、その背景にある男性優位の歪んだジェンダー構造を持つ社会についても言及した。

次に、エンマの語らない言葉の中に見られる「新しい女」としての萌芽を見いだした。現状に対する不満の原因の本質を見抜くこともできず、未熟で稚拙な現実逃避行動を選択したエンマの姿は、男性社会から「他者」と見なされつつも葛藤を続け、幸福になることを諦めないエンマの自我を体現したものである。たとえその選択の結果を自らの責任で引き受けることができず、自殺という悲惨なシナリオを描いたとしても、自らの幸せのために奔走するエンマの姿に、私たちは「新しい女」の可能性をみることができる。

最後に、言葉に着目しながら両作品の構造を分析した。『女の一生』は、言葉も自己もない主人公ジャンヌと不完全ながらも言葉のある召使いのロザリが協力し、助け合いながら人生を歩いていく構造になっている。一方で『ボヴァリー夫人』は、自らの心象世界を表現する言葉は持たないが、不満を認識し、現状を改善しようとする意志を持つエンマの苦悩と葛藤の物語である。男に憧れ、男のようになりたいと願って「男性化」し、自らの幸せのために奔走する姿に、私たちは、当時の歪んだジェンダー構造や、「新しい女」の可能性をみることができる。

『ボヴァリー夫人』は、男性中心主義に対する反抗の萌芽や「新しい女」の可能性を持った一人の女が、自分の理想を叶えるため、自己実現を求めて奔走する物語である。たとえ自ら命を絶つという悲惨な結果になったとしても、主体的に生きることを諦めなかったエンマは、後のフェミニズム運動につながる可能性としての女の姿である。

第4回中部支部大会 スナップ



2013（平成 25）年度 第5回中部支部大会のご案内

以下の日程で、中部支部大会を開催いたします。

日時：2014（平成 26）年3月2日（日） 10:00～16:50

場所：静岡県立大学（谷田キャンパス）

※当日、『静岡マラソン 2014（旧静岡駿府マラソン）』が開催されます。

混雑が予想されますので、時間に余裕を持ってお越しください。

発表を希望される方は、日本比較文化学会のホームページに掲載の「研究発表申込書」に必要事項を漏れなく記入し、平成 26 年 2 月 16 日（日）までに、中部支部事務局長・川口雅也宛に E メール（ファイル添付）でお送りください。（※申込期日を延期しました）

「研究発表申込書」の送付先：kawaguchi@hgu.ac.jp

中部支部大会『名古屋地区』開催者募集のご案内

今後、『名古屋地区』におきまして、中部支部大会を開催することを予定しております。つきましては、名古屋地区での支部大会開催推進の意思がある方を募集致します。

中部支部を、より充実・発展させていくために、是非ご協力いただきたく、お願い申し上げます。

開催を希望される方は、下記までご連絡下さい。お待ちしております。

○連絡先：053-485-6948

○tk-okamo@khaki.plala.or.jp（支部長：岡本 武昭）

『中部支部ニュース』第4号
発行：日本比較文化学会中部支部